



「希望のバトン」

J:COM 番組制作担当

フリーディレクター 梅津 敏郎

マザーテレサの言葉です。

「あなたの中の最良のものを与え続けなさい。蹴り落とされるかもしれませんが、気にすることなく最良のものを与え続けなさい」

東日本大震災が発生した 2011 年に一つのグループが誕生しました。グループの名前は「スコップ団」。最初に彼らと出会ったとき、私の胸を駆け抜けたのは、このマザーテレサの言葉でした。スコップ団は津波の被害に遭った人から依頼があると、指定された場所に赴き、泥かきを行いました。決して、マザーテレサの言葉に導かれたとは思えませんが、彼らの活動と接するたびにこの言葉が思い出されたことを覚えています。スコップ団団長の平了たいらりょうさんは「人助けに理由はいらぬ」「自分の家だったらどこまで徹底するか」と掲げて活動を続け、その数は 1 年間で 300 軒を超えました。その後平さんは 1 年でスコップ団を解散し、社会人による応援団「青空応援団」を結成します。「支援は一時的な活動だが応援はいつまでもできるから」という理由からです。誰もが誰かの応援団でいたい、という思いが、あの日を体験した人たちを思い、活動が続きます。

震災直後、「自分たちにできることは」「今すべきことは」と考えた大学生たちが中心となって「リルーツ」が生まれました。大学生が中心だったため、自転車で移動できる地域の復旧に専念し、場所を仙台市若林区の農村地域に限定。津波で流れ込んだがれきやゴミの撤去作業を始めました。周囲の農家の人たちから、学生たちによる一過性のボランティアと思われたくないからと、様々な要望にも応えながら彼らは活動を続けました。農業には無縁だった若者たちが、農家の人の教えを受けながら、仙台の穀倉地帯とよばれる若林区の復旧に挑みました。延べ 400 人を超える大学生が、自分たちの「ふるさと」を取り戻そう、という思いが農家の人たちにも認められたようで

すと話します。震災から 12 年後、今もリルーツは活動を続け震災の記憶が乏しい世代のメンバーも加入して、持続可能な農村のあり方を学びながら活動を続けています。中には宮城県外から東北大学に入学し、リルーツを体験して若林区で就農した若者がいます。

東京世田谷でプレーリーダーとして活動していた須永力すながつとむさん。須永さんは、大人が仕事を行うように、子どもには遊びが必要だと感じてこの仕事を選びました。1995 年の阪神淡路大震災が発生した時も神戸の団体の要請を受け、子どもたちの居場所、遊び場を作ってきました。それから 16 年後、東日本大震災後は、東北の子どもを支援する団体から要請され子どもたちのための居場所づくりを続けています。東北の市民団体などとの活動は、震災後から 2000 回を超えました。震災から 5 年経った時、石巻の幼稚園を訪れる機会がありました。その時「オレ生まれてから今日が一番楽しかった」と話す子どもの声を聞きます。生まれてきて 5 年。今日が一番楽しかったという言葉、子どもが発しないようにする社会づくりをしてほしいと須永さんは話します。須永さんはあの日から宮城に足を下ろし、宮城県人として子どもたちのために活動を続けています。

スコップ団の平さんはいつも話していました。大人は子どもたちのために、と。

今、想像します。震災を契機に出会った若い世代が同志となって未来へと飛び込んでいく姿を。希望のバトンはいつまでも続くことを願います。そして、子どもたちの未来にいつまでも幸せと希望のシャワーが降りそそぎ続けることを祈ります。

